

## 古代日本語における受身表現

川村 大

西洋諸言語の passive sentence に当たる古代語の表現としては、伝統的に、動詞に所謂助動詞ル・ラル(上代語ではユ・ルイ)が下接した形を述語とする文(の、あるタイプ=受身用法)を挙げることになっている。西洋諸言語の passive sentence と日本語のル・ラル下接形述語文受身用法との間には、具体的な用法のレベルでは少なからぬ差異がある(それは本特集のデータを見ても明らかである)のだけれども、格体制や表す意味において、passive sentence と最も多くの共通性を持つ構文がル・ラル下接形述語文受身用法であるということもまた否定できない。本稿ではこうした通常的了解に従い、ル・ラル下接形述語文受身用法について、本特集の質問項目の範囲で概観する。<sup>2</sup>

以下、本特集の他の記事との対照の便宜を考慮し、調査項目の順に叙述を進めることとする。が、いくつかの点で他言語の記事とは掲出方法が異なる。母語話者が現存しないため、「作例」は不可能である。したがって、調査項目の示唆する受身文のタイプにできるだけ近い実例を挙げることとする。同様の理由で、受身文に対応する「能動文」の掲出は割愛する。また、調査項目に該当する受身文が古代語に存在しない場合、それに代わるどのような表現が有り得たか、については目下十分に答える用意がない。今後の課題としたい。

ル・ラル下接形述語文受身用法のほかにも、他言語の passive に似た格体制・用法を持つものとしては、「見ゆ」「聞こゆ」「思ほゆ・思ゆ」を述語とする文があり、<sup>3</sup> また、他動詞に自動詞派生語尾を添えて派生した自動詞(「掛かる(←→掛く)」「曲がる(←→曲ぐ)」など)を述語とする文もある。それ以外にも、対照研究を意識する場合には、動作対象を「は」で題目化した構文も考慮の対象とすべきかもしれない。しかし、それらについての検討は一切割愛する。

用例には、グロスに代えて、逐語訳に近い現代語訳を添えた。

<sup>1</sup> 上代の文献にはラルの仮名書き例が存在しない。また、上代には自発・可能・受身を表すユ・ラユという助動詞があるが、このうちラユには可能を表す例しかないので、本稿の検討の対象にはならない。

<sup>2</sup> 現代語のレル・ラレル下接形も含めた「動詞ラレル形」述語受身文に関する筆者の了解は川村(2003,2004)参照。また、受身文の学史についての筆者の了解は川村(近刊)参照。

<sup>3</sup> 各用法や格体制などについては、川村(2008b)およびその参考文献を参照。

検討の対象は 11 世紀初頭以前の和歌・物語等<sup>4</sup>の用例である。確認できる限り上代（奈良時代以前）と中古（平安時代）の例を併記するようにした。

各項目への回答に入る前に、述語動詞の形態や格体制について確認する。周知のとおり、動詞のル・ラル下接形受身用法は、「四段活用動詞未然形+ル（上代ではユも）」、「一・二段活用動詞・サ行変格活用動詞未然形+ラル」で構成される。<sup>5</sup> 動作対象 object あるいは被影響者 affectee が主語に立つと考えられ、格表示される場合はガ・ノが現れる。一方動作主 agent が文中に現れる場合は二で表示される。<sup>6</sup>

- 1) わざとにはあらで時々物言ひふれ侍ける女の、心にもあらで人に誘はれてまかりにければ、宿直物に書きつけてつかはしける（後撰 613 詞書）<sup>7</sup>

（歌の作者が）身を入れてではなくて時々言い寄っておりました女が、自らの意志ではないが、他の男に誘われて、よそへ参りましたので、（女の許に置いていた）外泊用の夜着に書き付けて送りました（歌）

- (7) A は B に叩かれた。

いわゆる直接受身文で、主語（動作対象・被影響者）がヒトである場合である。用例は多数存在するが<sup>8</sup>、ここでは、後述(7)(2)との対照を考慮し、主語者が物理的影響を被る例を選んで挙げる。

- 2) みどり子の若子髪にはたらちし母に懐かえ（垂乳為母所懐）（略）（万葉 3791）  
（赤ん坊の赤子髪の頃は（たらちし（枕詞）母に抱かれて……）

- 3) 「(略) 龍は鳴る神のるいにこそありけれ。それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられなむとしけり。まして龍を捕へましかば、又こともなく、我は害せられなまし。(略)」（大伴御行一人々）（竹取）

<sup>4</sup> 調査した文献は本稿末尾参照。

<sup>5</sup> ルはラ変動詞・ナ変動詞にも下接し得るし、ラルはカ変動詞にも下接し得るが、調査範囲では受身用法の例が存在しない。中古においてラ変・ナ変・カ変動詞のル・ラル下接形受身用法が見つからないことについては和田(1969:17)の指摘がある。

<sup>6</sup> なお、漢文訓読の場合や、漢文訓読の影響を受けた文章では、ノタメニで動作主を表示することがある（三浦 1973, 大坪 1981, 吉岡 1993, 小田 2003 他）が、本稿の調査範囲には存在しない。

<sup>7</sup> 例文に使用したテキストは本稿末尾参照。ただし、読みやすさを考慮して適宜表記を改め、末尾に文献の略称と歌番号・巻の名称を添えた。

(「……. 竜はほかならぬ雷の同類であった. その玉を取ろうとして, 大勢の人々が殺されてしま  
いそうになったのだった. まして, もし竜を捕らえたら, またあっさりと私は殺されてしまっ  
たろう. ……」)

(i) A は B に足を踏まれた (持ち主の受身, 体の部分)

(i)(ウ)は, いわゆる間接受身文のうち, 直接の動作対象がヲ格等の形で文中に残り, かつ  
主語に立つ被影響者と直接の動作対象との間になんらかの所有関係が認められるタイプ  
(いわゆる「持ち主の受身」)である. そのうち, (i)のように, 動作対象 (掲出例では「足」)  
が被影響者の身体部位や性質・言動など, 分離不可能 *inalienable* なものである例は, 中  
古にも存在する (cf.堀口 1983).

4) (略), 心にまかせてはやりかなるすき事をさをさ好まず, よろづの事もてしづめつつ,  
おのづからおよすけたる心ざまを人にも知られたまへり. (源氏 匂宮)

(…… (薫は), 気ままで軽薄な色事を全く好まず, 万事冷静で控えめに振舞い, 自然とその老  
成した心ばえを人にも認められていらっしやる.)

5) 古代の人の指貫着たるこそ, いとたいだいしけれ. (中略)猿の手結はれたるやうにほ  
どき立てるは, とみのことにいでたつべくも見えざめり. (枕 272 段)

(昔風の人が指貫をはいている様子こそ, たいそうぎこちない. ……猿が手を縛られたように (後  
手に紐を) ほどきながら立っているのは, 急用には出かけられそうにも見えない様子だ)

上代には, (i)タイプの確例が無い (鷲尾 2005). 辛うじて『古事記』本文にそれらしい  
例はあるものの, 変体漢文なので語の形態, とりわけ動作対象項の格表示 (ヲかどうか)  
が判明せず, 後述(キ)のタイプとの区別がつかない.

cf. 1 因生此子, 美蕃登(訓注略)見炙而病臥在. (訓読<sup>8</sup>: 此の子を生みしに<sup>よ</sup>因りて, みほと  
を<sup>あ</sup>かえて病み臥して在り) (記 上 神代)<sup>9</sup>

((イザナミの命は), この子 (=火の神) を生んだことで, 女陰を (が?) 焼かれて病気になっ  
て臥せていた)

cf. 2 故, 其菟, 從八十神之教而, 伏. 爾, 其塩随乾, 其身皮, 悉風見吹析. (訓読: 故,  
<sup>かれ</sup>

<sup>8</sup> 引用テキスト (新編日本古典文学全集) の訓読による (表記を一部改変).

<sup>9</sup> 同趣旨の神話が述べられている延喜式祝詞「鎮火祭」(成立年不詳)の一節では, 「みほとを焼かれ  
ましき (御保止<sup>ヲ</sup>所焼坐<sup>キ</sup>)」と, ヲが表記される (鷲尾 2005 にも指摘される).

其の菟<sup>うさぎ</sup>、八十神<sup>やそがみ</sup>の教に従ひて、伏せりき。爾<sup>しか</sup>くして、其の塩の乾<sup>ま</sup>く隨<sup>ま</sup>に、其の身の皮、悉く風に吹き析かえき) (記上 神代)

(ここで、その菟は、大勢の神々一行の教えに従って、(海水を浴びて) 横になった。すると、その海水が乾くにしたがって、その体の皮が(を?)、すべて風に吹き裂かれた)

(ウ) A は B に財布を盗まれた (持ち主の受身, 持ち物)

(ウ)は(イ)と同様「持ち主の受身」であるが、直接の動作対象(掲出例では「財布」)が主語者の持ち物(つまり、分離可能 alienable なもの)である場合である。中古には次のような例がある (cf.堀口 1983).

6) 石川の高麗人に帯を取られて (於比乎止良礼天) からき悔いする (略)

(催馬楽 呂 石川)

(石川住まいの高麗人に帯を取られてひどく後悔している)

7) ことにきらきらしからぬ男の、たかきみじかきあまたつれだちたるよりも、すこし乗り馴らしたる車のいとつややかなるに、牛飼童、なりいとつきづきしうて、牛のいたうはやりたるを、童はおくるるやうに綱引かれて遣る。(枕 203 段)

(特に目立つ様子でもない従者で背が高い者や低い者を、大勢ひき連れているのよりも、少し乗り慣らした牛車でとてもつやつやしているのに、牛飼童は身なりがとてもふさわしく、牛がひどくはやり立っている、その牛を、牛飼童が少し遅れるように綱を引かれながら進める様子)

上代では、(イ)の場合と同様、動作対象をヲで表示した確例が無い(鷲尾 2005)。『万葉集』の下記の例が該当するようだが、後述(キ)タイプである可能性を排除できない。

8) (略)薪伐りほとほとしくに手斧取らえぬ (手斧所取奴) (万葉 1403)

((神域の山で) 薪を切り、すんでのところで手斧を(が?)取られるところだった)

(I) 昨日の夜、私は赤ん坊に泣かれた。それでちっとも眠れなかった (自動詞からの間接受身)

間接受身文の一種としての、いわゆる「自動詞の受身」の用例かどうかを、古代語の具体例について判定するのは、実はそう容易ではない。<sup>10</sup> 以下では、従来「自動詞の受身」と

<sup>10</sup> 第一に、古代語のある動詞が「自動詞」なのかどうかを「実証」するのが極めて困難であるという

言われている用例の簡単な検討に留まる。

「自動詞の受身」の例には大きく2種類あるといえそうである。まず、次のような気象に関わるものが指摘される。

- 9) 沫雪に降らえて咲ける梅の花(沫雪尔所落開有梅花)(略) (万葉 1641)  
 (淡雪に降られて咲いている梅の花よ)
- 10) あはれなるもの(中略)夕ぐれ・あかつきに、川竹の風に吹かれたる、目さまして聞きたる。(枕 119段)  
 (しみじみするもの……夕暮れ・夜明け方に、川竹が風に吹かれている、その音を、目を覚まして聞いているの)
- 11) 秋の野の露に置かるる女郎花はらふ人無み濡れつつやふる (後撰 275)  
 (秋の野の露に置かれているおみなえし(女性の隠喩)は、払う人もなく濡れたまま過ごしているのか)
- 12) 「霞にたちこめられて、筆のたちどもしられねば、あやし」(兼忠女一道綱母(消息))  
 (蜻蛉 下 天禄三年二月)  
 (「霞に立ち込められて(=涙で目が曇り)、(手紙を書こうにも)筆が紙のどこに立つのかもわかりませんので、(乱筆で)お見苦しゅうございます」)

上記の例文で述べられている事態においては、被影響者は雪に濡れ、風に揺れ、露に濡れ、(比喩的な意味で)霞に視界を覆われるなど、直接的な物理的影響を被っている。その意味で、被影響者の当該事態への関与性 involvement (久野 1983) の高さが認められるものばかりである。なお、これらの例文の述語動詞の用例を検討すると、「自動詞か他動詞か」という議論は別として) 雨の降りかかる先や風が吹き付ける先などが格成分として文中に現れる場合がある。<sup>11</sup>

---

問題がある。古代語の個々の動詞が実際にどのような格項目を要求する(あるいは、しない)のかについて、現時点では実例に基づいた丁寧な検討がなされているわけではない。また、ある動詞について文献上ヲ格名詞をとる例が存在しないことが確認できたとしても、そのことが直ちに「その動詞が当時実際にヲ格名詞を要求しなかった」ということを意味するわけではないのである。第二に、ヲ格名詞を要求しない動詞であることが直ちに「直接受身文を構成しない=『自動詞の受身』しか作らない」ということを意味するわけではない、という問題もある。直接受身文の主語になる名詞項は対応する「能動文」のヲ格名詞に限らない。後述の調査項目(□)にあるように、対応する「能動文」の二格が受身文主語に成る場合もある。論者によっては現代語の「太郎が泥棒に財布を盗まれた」の主語を「泥棒が太郎から財布を盗んだ」のヲ格名詞に対応すると考えている。

<sup>11</sup> 例10)の「ふかる」について、鷲尾(2008)は、「(風)ふく」の他動詞用法(「風(が)X(を)ふ

- cf. 3 我がやどの君松の木に降る雪 (吾屋戸乃君松樹尔零雪) の(略) (万葉 1041)  
 (私の家の、君を「待つ」の「まつ」ではないが、松の木に降る雪のように……)
- cf. 4 我がやどのいささ群竹吹く風 (伊佐左村竹布久風) の(略) (万葉 4291) (cf. 鷲尾 2008)  
 (私の家のいくばくもない群竹に吹く風の……)
- cf. 5 夕占問ふ我が衣手に置く露 (夜占問吾袖尔置露) を(略) (万葉 2686)  
 (夕占 (外で行う占いの一種) をする私の袖に置く露を……)

「自動詞の受身」として挙げられる例は、そのほかに、ヒトの行為をめぐるものが挙げられる。

- 13) さるは、いといたく世を憚り、まめだちたまひけるほど、なよびかにかしきことはなくて、交野の少将には、笑はれたまひけむかし。(源氏 帚木)  
 (実際は、(源氏は) ほんとうにひどく世間を憚り、まじめそうに振る舞っておられ、そうした間は、艶っぽくておもしろいことは無くて、(昔物語の主人公で色好みの) 交野の少将には笑われなさったであろうよ)
- 14) 「昨日のおぼつかなさを、悩ましく思されたなる、よろしくは参りたまへ。久しうもなりにけるを」などやうに聞こえたまへれば、騒がれたてまつらむも苦しけれど、まことに御心地もたがひたるやうにて、その日は参りたまはず。(源氏 浮舟)  
 ((匂宮宛に母中宮から消息)「(あなたがお忍びで都を留守にしていた) 昨日の心配といたら、御気分がお悪かったそうですが、それがもう良ければ参内なさい。(会わずに) 久しくなってしまうものを」などというように申し上げなさっているので、(匂宮は、自分が参内せずに) お騒がれ申し上げるとしたら、それもつらいけれども、本当にお加減も悪くなったようで、その日は参内なさらない。)

このうち、例えば例 13)などに見られる「笑ふ」は、「ヒトの言動などを笑う、嘲笑する」

---

く) が (一定の制約はあるものの) 存在すると主張し、古代語から現代語にかけての実例 (cf. 4 を含む) や他言語との対照データをもとに論じている。

例 12)の「たちこめらる」については、対応する「能動文」自体が調査範囲に見出し難いが、『宇津保物語』に他動詞用法の例がある。ただし、この資料は本文に問題が多いので、この用例の位置づけも慎重に検討する必要がある。

めづらしき君に会ふ夜は春霞天の岩戸を立ちも込めなむ (宇津保 あて宮)  
 なお、既に堀口(1983:42)は、「たちこめらる」が本来「(雨に) ふりこめらる」と同様他動詞の受身であったのではないかと述べている。

の意味で用いられている。この意味の「笑ふ」は、動作対象をヲ格で表示する例もある。

cf. 6 これらをひとのわらふをきゝて、(略) (土佐 一月九日)

(これら (=水夫や船頭らの歌) を人が笑うのを聞いて、……)

また、例 14)などに見られる「騒ぐ」は、「ヒトの行状をめぐって他の人々があれこれ言う、不平を言う」などの意味を表している。また、例 14)と同じ用法とはいえないが、「原因」項が二格で文中に出る例も指摘できる。

cf. 7 さくらゆゑ風にこころのさわぐかな(略) (源氏 竹河)

((大君の歌) (咲いている) 桜ゆゑ、風に心が落ち着かないこと。……)

以上、従来指摘されている古代語の「自動詞の受身」の諸例は、主語に立つ被影響者の事態への実態的な関与の度合いが高いものに限られており、一部「他動詞の受身」と見るべきものも含まれるようである。少なくとも、現代語なら問題のない「自動詞の受身」である「(子に) 泣かれる」「(親に) 死なれる」「(社長に) 倒れられる」「(客に) 来られる」などに相当する例はなかなか見つからない。また、例えば例 10)と同様「吹かれる」を用いるとしても、屋敷の中から庭を眺めて「こう強く風に吹かれては花が枯れてしまう」と述べるような例も管見では存在しない。<sup>12</sup>

(4) 新しいビルが (A によって) 建てられた。(モノ主語受身、一回的)

モノ主語の受身文は、現代語では通常動作主項が文中に現れない。現れる場合も、特殊な場合(後述(4)(5)(7)タイプ等)を除いて、二では表示できず、二ヨツテを用いる。とりわけ一回的な事柄を報告する文で、かつ動作主が特定のヒトである場合<sup>13</sup>、動作主を強いて二

<sup>12</sup> (1)に関する議論の骨子は、堀口(1983,1990)における議論とほぼ同趣旨である。堀口(1983:41f)は、古代語の「降らる」「吹かる」「騒がる」について、対応する「能動文」に「～二」の項が想定できる「直接の受身」(本稿の直接受身文)だと述べる。堀口氏の主張の意図が、古代語の「自動詞の受身」の全てについて対応する「能動文」に二格名詞を想定することにあるのかどうか、必ずしも明確ではないが、当該受身文の主語者について、文に述べられている事態からこうむる影響が直接的である、と理解する点は当たっていると思われる。なお、古代語の「自動詞の受身」が、主語者の事態への関与性が高いものに集中することは、井島(1988)、柴谷(2000)でも指摘されている。

<sup>13</sup> 久野(1986)は、モノ主語受身文であっても動作主が不特定の場合は二表示が許容されるという。あの定理は、誰かに証明されたはずだ。(久野前掲(27a)による)  
ただし、この種の文の許容度には個人差があるようである。益岡(2000)は許容されないとする。

で表示すると、文で述べられている事態の影響を被るヒトの存在が文外に暗示されてしまう（つまり、後述(キ)タイプとして解釈される）。

cf. 8 集まった受動文のデータが世話役たち {によって/\*に} 検討された。

掲出例や cf.8 のような受身文は、近代以降欧文直訳体の影響で一般化したもので、それ以前の日本語にはなかなか見つからないといわれる（金水 1991,1993）<sup>14</sup>

ただしこのことは、古代語にモノ主語受身文がない、ということの意味しているわけではない。モノ主語受身文は古代語にも少なからず存在する<sup>15</sup>。しかし、それらは次の3タイプのどれかひとつにほぼ該当する（川村 2003,2004, 岡部近刊）。第一に、擬人法を含め、自然叙述と人事を重ね合わせる表現（和歌の表現など（金水 1991:9）。今回の調査項目には無い）<sup>16</sup>。第二に、モノ主語受身文だが文外に人格的な被影響者が想定されるタイプ（後述(キ)）である。この2タイプは、モノ主語ではあるが事実上人格的な被影響者が存在し、その意味で「広義のヒト主語受身文」と言うこともできる。それらを除いた残りの、いわば「純モノ主語受身文」の用例は、ほぼすべてが共通の特徴を持ち、第三のタイプを形成する。すなわち、動作対象であるモノの身の上に動作の結果生じた状況を描写するタイプ（後述(ク)）である。以上の3タイプは、いずれも掲出例とは異なる表現類型であると言え、そのことは、動作主項を二で表示できるという点にも現れる。

さて、それ以外の（つまり、事実上人格的な被影響者が存在するタイプでもなければ、モノの状況を描写するタイプでもない）、モノの身の上に生じた一回的な事柄をただ報告するタイプの文（掲出例や cf.8 など）は、古代語ではなかなか見つからない。また、調査項目の掲出例のような作成動詞によるモノ主語受身の場合、結果状態表現であっても確実な例は見出せない（cf. 金水 1993:494）。下記の例は一見受身文のようだが、この種の例のル・ラルは尊敬の意味を表わすと（も）解釈できるものばかりであり、かつ動作対象を主格表示した例が調査範囲に見出せない。

---

<sup>14</sup> 漢文訓読の場合、および漢文訓読の影響を受けた文体の場合はその限りではない（金水 1991, 岡部近刊）。

<sup>15</sup> 古代語のモノ主語受身文については、山田(1908)の先駆的考察の後、戦後に宮地(1968)、三浦(1973)、小杉(1979)、清水(1980)、奥津(1983,1988,1992)、中島(1988)、金水(1991)などの考察がある。

<sup>16</sup> 「我がやどに生ふる土針心ゆも思はぬ人の衣に摺らゆな（従心毛不想人之衣尔須良由奈）」（万葉 1338）、「瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれてもすゑにあはむとぞ思ふ」（詞花 229）など。

- cf.9 「けふ雪の山作らせ給はぬところなんなき。御前のつぼにも作らせ給へり。春宮にも弘徽殿にも作られたりつ。京極殿にも作らせ給へりけり」(源忠隆一少納言)

(枕 87段)

(「今日雪の山をお作りにならないところはありません。帝の御前の壺庭でもお作りになっています。東宮でも弘徽殿でも作られました。京極殿(=藤原道長邸)でもお作りになりました」)

- cf.10 常の御念誦堂をばさるものにて、ことに建てられたる御堂の西の対の南にあたりて、少し離れたるに渡らせたまひて、とりわきたる御行ひせさせたまふ。(源氏 賢木)  
(出家後の藤壺)ももとの御念誦堂はそのままにして、特別に建てられたお堂で、西の対の南に当たって少し離れている、そのお堂にお移りになって、特に入念なお勤めをなさる)

- (カ) カナダではフランス語がはなされている。(モノ主語受身, 恒常的. 動作主が問題にならない場合)

掲出例のような、「(ある地域における)ある慣習の存在」という事態を受身文で表現した例は、管見では存在しない。

なお、掲出例の類例として、「この雑誌は10代の若者によく読まれている」などの「属性叙述受動文」(益岡 1982)の存在が知られている。<sup>17</sup> 古代語でもモノの属性を語る受身文がないわけではない。<sup>18</sup> しかし、それらはたいてい擬人法であったり、文外に人格的被影響者が想定できる(つまり、後述(キ)タイプ)。それらを除くと、モノの属性を語る受身文は、あるとしてもごく少数である(cf.金水 1991)。

次の例は、上記の意味での(つまり、事実上の人格的被影響者が存在するというわけではない、ただモノの属性を語るだけの)「属性叙述受動文」かとも読める少数例の一つである。<sup>19</sup> これら少数例をいかに位置づけるべきか、なお検討を要する。

- 15) 楠の木は、木立おほかる所にも、ことにまじらひたてらず、おどろおどろしき思ひやりなどうとましきを、千枝にわかれて恋する人のためにいはれたるこそ、たれかは数を知りていひはじめけんと思ふにをかしけれ。(中略)椎の木、常磐木はいづれもあるを、それしも、葉がへせぬためにいはれたるもをかし。(枕 40段)

<sup>17</sup> モノ主語受身文であり、人格的な被影響関係を表さないが、動作主項を二で表示できるという特殊なタイプの受身文として知られる(益岡 1982, 川村 2003, 2004)。

<sup>18</sup> ヒト主語受身文による属性叙述表現は、問題なく例を挙げられる(連体修飾の例が多い)。下記の例のほか、(イ)の例4)もその一つといってよい。

ありがたきもの 舅にほめらるる婿。また、姑に思はるる嫁の君。(枕 75段)

<sup>19</sup> 金水(1991:6)において、第1文が「種の履歴」を述べるタイプの例として挙げられている。

(楠は、木立が多いところにも特に他の木に混じって立ってはおらず、鬱蒼と茂ったさまを想像するのも気味が悪いが、千の枝に分かれ、恋する人の心の例として(歌に)詠まれているのこそ、誰が(枝分かれの)数を知ってそう言い始めたのだらうと思うにつけて面白い。……椎の木。常緑樹はどれでもそうだが、ほかならぬこれが、葉を替えない例として(歌に)詠まれているのも面白い。)

(キ) 財布が(Aに)盗まれた(モノ主語受身, モノ主語の背後に被影響者が想定される)モノ主語(掲出例では「財布」)の背後に人格的な被影響者(益岡(1991)「潜在的受影者」。掲出例では「財布」の持ち主)が想定されるタイプの受身文である。このタイプのモノ主語受身文は中古にも存在する。

- 16) 「(略). なほ、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ。(略)」  
(源氏一大宮)(源氏 少女)  
(「……. やはり、漢学の学問を基としてこそ、実務的な才覚が世に用いられる方面も強うございましょう。……」)
- 17) 「(略). 大将もいかに思はんとすらん。さるべきほどとはいひながら、あやしきまで昔より睦ましき中に、かかる心の隔ての知られたらむ時、恥づかしう、(略)」(匂宮一浮舟)(源氏 浮舟)  
(「……. (貴方とこういう仲になったと知ったら)大将(=薫)もどう思うだろう。そうなるはずの(親族の)関係とはいいいながら、不思議なほど昔から仲のよい(私と薫の)間柄で、このよくな内緒事が知られたとしたら、その時は恥づかしく、……」)

上代には、持ち物に当たるものを格表示した確実な例がないので、有ったとも無かったとも断定できない。下記の例や(イ)(ウ)に引いた cf.1,2 や例 8)が、あるいはこのタイプにあたるかとも考えられる。

- 18) 夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋(不知所恋)は苦しきものぞ(万葉 1500)  
(夏の野の繁みに咲いている姫百合のように(相手に)知られない恋は苦しいものだ)

(ク) 壁に絵が掛けられている(モノ主語受身, 結果状態の叙述)

古代語で確認できるモノ主語受身文のひとつに、(ク)に該当するタイプがある(金水 1991)。動作の結果、動作対象たるモノに発生した何らかの状況を叙述するというものである(尾

上(2000)「発生状況描写」.<sup>20</sup> 多くの例は、(ク)の設問の対象である結果状態の表現(視覚的な状況描写. 下記の例 19), 20)など)であるが、音の存在を問題にする場合(聴覚的な状況描写. 例 21)などは、必ずしも結果状態とは言えない。

中古ではある程度まとまった用例が指摘できる(下記の例のほか、例 10)も参照).<sup>21</sup>

19) せばき縁に、所せき御装束の下襲ひきちらされたり。(枕 104 段)

((東宮妃原子, 中宮定子に対面. 道隆等も同席) 狭い縁に、(道隆・伊周・隆家の) あたりが狭く感じられるほど仰山な束帯の下襲が広げられている)

20) あをやかなる御簾の下より、几帳の朽木形いとなつややかにて、紐の風に吹きなびかされたる、いとおかし。(枕 89 段)

(青々とした御簾の下から、几帳の(帷子の模様である)朽木形がたいそうつやつやとして、(帷子の)紐が風に吹きなびかされているのは、たいそうおもしろい)

21) 庭療の煙のほそくのぼりたるに、神楽の笛のおもしろくわななき吹きすまされてのぼるに、歌の声もいとあはれに、いみじうおもしろく(略)(枕 142 段)

((賀茂臨時祭の還立の御神楽) 庭の篝火の煙が細く立ちのぼっているところへ、神楽の笛がおもしろく震えるように澄んだ音で吹かれて、(その音が)空へとのぼる、そのうえに、歌の声もたいそうしみじみと、とてもおもしろく……)

なお、このタイプの受身文の動作主項で、文中に現れるのは「風」(例 20)などの非人格的存在に限られる。ヒトの場合は文中に現れない(金水 1991)。

(ク) A は B に / から愛されている。(感情述語の受身、特に動作主のマーカ-に注目)

現代語の場合、心理的態度や知覚行為を表わす「愛する」「憎む」「見る」をはじめ、言

<sup>20</sup> (オ)で述べたとおり、古代語に存在するモノ主語受身文3タイプのうち、第一タイプと第二タイプ((キ))は、事実上人格的な被影響者が存在し、また、ヒト主語受身文と同様「主語者が文に述べられた事態から(利害を問わず、また直接的か間接的かを問わず)何らかの影響を被る」という意味を帯びる。しかし、第三のタイプ((ク))は、人格的被影響者が存在するとは言えないし、従って上記の意味での「被影響」の意味が現れない(この点についての詳細は川村(2003,2004)を参照)。ラレル形述語文受身用法を意味によって規定しようとする尾上(2000,2003)は、「(受身)」を上記の意味での「被影響」の意味を表すものに限る一方、第三タイプ((ク))を「(発生状況描写)」と名づけ、「(受身)」用法とは別のラレル形述語文の一用法と位置づけている。本稿筆者も尾上(前掲)の立場に立つが、ここでは通常の了解どおり、第三タイプ((ク))を受身文に含めて叙述する。

<sup>21</sup> 上代では確実な例が見出し難い。強いて言えば(イ)で引いた例 9)が該当するであろう。ただし、和歌の表現であることもあり、擬人法あるいは人事を重ね合わせた表現((オ)で述べたモノ主語受身文3タイプのうちの第一タイプ)であるという解釈を排除できない。従って、純粋な「モノ主語受身文」だとは断言し難い。

語伝達を表わす「言う」「告げる」などやモノの授与を表わす「与える」「贈る」など、いくつかの動詞を用いる受身文において、動作主をカラで表示することがある。<sup>22</sup> 一方、古代語では、現代語のカラに相当する助詞ヨリ・ユリ・ヨ・ユ（ユリ以下は上代語）で動作主を表示する例は見出せない。

22) (略)か行けば人に厭はえかく行けば人に憎まえ(略) (可由既婆 比等尔伊等波延 可久由既婆 比等尔迹久麻延) (万葉 804)

(…… (年をとると) あちらへ行けば人に嫌がられ、こちらへ行けば人に嫌われ……)

23) 「(略) おもふ人の人にほめらるるは、いみじううれしき」(源経房一少納言) (枕 136 段)

(「…… (自分が) 好意を抱く人が他の人にほめられるのは、とても嬉しいことです」)

(3) AはBに／から「…」と言われた。(伝達動詞の受身、特に動作主のマーカ―に注目) 受け手を二格に取る伝達行為の動詞を用い、その二格名詞を主語に立てるタイプの受身文の例である。中古には例があるが、上代には該当の用例が見つからない。<sup>23</sup> 動作主項をヨリ等で表示する例がないこと、上記(2)と同様である。

24) なほあはれがられてふるひなき出でたりしこそ、よに知らずをかしくあはれなりしか。人などこそ人にいはれて泣きなどはすれ。(枕 9 段)

((一度宮中を追放された犬が、その後許された) やはり、同情されて、震えて鳴き声を上げたのこそ、世に類もなく面白くまた感動的だった。人などこそは、人に(やさしい)言葉をかけられて泣きなどはするが)

<sup>22</sup> 寺村(1982)、砂川(1984)、細川(1986)、佐伯(1987)など、多数の研究がある。詳細については割愛する。

<sup>23</sup> なお、上代の「言はる」の例は、みな「批判される、評判を立てられる」という意味である。調査項目(3)には当たらない。

<sup>(321)</sup> 凡ろかのわざとは思はじ 我が故に人に言痛く言はれしものを(人尔事痛 所云物乎) (万葉 2535)

### 参考文献

- 井島正博(1988)「受身文の多層的分析」『防衛大学校紀要』57
- 大坪併治(1981)『平安時代における訓点語の文法』風間書房
- 岡部嘉幸(近刊)「いわゆる『非情の受身』の諸類型」尾上圭介編(近刊)
- 奥津敬一郎(1983)「何故受身か?—〈視点〉からのケース・スタディー」『国語学』132
- 奥津敬一郎(1988)「続・何故受身か?—『万葉集』の場合」『国文目白』28
- 奥津敬一郎(1992)「日本語の受身と視点」『日本語学』11 巻9号
- 小田勝(2003)「古典文における使役文・受身文の格表示—『今昔物語集』を例として—」『岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編』42 (再録:「古典文における使役文・受身文の格表示」『古代語構文の研究』おうふう 2006)
- 尾上圭介(2000)「ラレル文の多義性の構造と主語」文法学会第2回集中講義(発表資料は尾上(近刊)第2章第8節に収録予定)
- 尾上圭介(2003)「ラレル文の多義性と主語」『言語』32 巻4号(再録:尾上近刊)
- 尾上圭介(近刊)『文法と意味Ⅱ』くろしお出版
- 尾上圭介編(近刊)『ラレル文の研究』くろしお出版
- 川村大(1993)「ラル形式の機能と用法」松村明先生喜寿記念会編『国語研究』明治書院
- 川村大(2003)「受身文の研究史から—『被影響』の有無をめぐる議論について」『言語』32 巻4号
- 川村大(2004)「受身・自発・可能・尊敬—動詞ラレル形の世界—」尾上圭介編『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』朝倉書店
- 川村大(2005)「ラレル形述語文をめぐる—古代語の観点から—」『日本語文法』5 巻2号
- 川村大(2008a)「動詞ラレル形とその周辺」言語学会夏期講座2008教材
- 川村大(2008b)「『見ゆ』『聞こゆ』『思ほゆ・思ゆ』の格体制—動詞ラレル形との対照の観点から—」『東京外国語大学外国語学部論集』77
- 川村大(近刊)「受身文をめぐる学説史—受身の『意味』を問う観点から—」尾上編(近刊)
- 金水敏(1991)「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164
- 金水敏(1993)「受動文の固有・非固有性について」『近代語研究 第九集』武蔵野書院
- 久野暲(1983)『新日本文法研究』大修館書店
- 久野暲(1986)「受身文の意味—黒田説の再批判」『日本語学』5 巻2号
- 小杉商一(1979)「非情の受身について」『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』桜楓社
- 佐伯哲夫(1987)「受動態動作主マーカー考」(上)(下)『日本語学』6 巻1,2号(補訂の上

- 再録：『現代語の展開』和泉書院 1989)
- 柴谷方良(2000)「ヴォイス」仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法 1 文の骨格』岩波書店
- 清水慶子(1980)「非情の受身の一考察」『成蹊国文』14
- 砂川有里子(1984)「『ニ』と『カラ』の使い分けと動詞の意味構造について」『日本語・日本文化』12
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 中島悦子(1988)「『万葉集』における『非情の受身』」『(日本女子大学大学院の会) 会誌』7
- 細川由起子(1986)「日本語の受身文における動作主のマーカ―について」『国語学』144
- 堀口和吉(1983)「〈はた迷惑の受身〉考」『山辺道』27
- 堀口和吉(1990)「競合の受身」『山辺道』34
- 益岡隆志(1982)「日本語受動文の意味分析」『言語研究』82 (再録：「受動表現の意味分析」『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版 1987)
- 益岡隆志(1991)「受動表現と主観性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版 (再録：『モダリティの文法』くろしお出版 1991)
- 益岡隆志(2000)「叙述の類型から見た受動文」『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 三浦法子(1973)「平安末期の受身表現についての一考察」『岡大國文論稿』1
- 宮地幸一(1968)「非情の受身表現考」『近代語研究 第二集』武蔵野書院
- 山口佳紀(2005)「『古事記』における使役・受身の表記と補読」『古事記の表現と解釈』風間書院
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』宝文館
- 吉岡徳子(1993)「受身文の一考察—タメニ受身文を中心に—」『梅花日文論叢』1
- 鷲尾龍一(2005)「受動表現の類型と起源について」『日本語文法』5巻2号
- 鷲尾龍一(2008)「概念化と統語表示の問題—日本語・モンゴル語・朝鮮語の比較から見る《風に吹かれる》の本質—」生越直樹・木村英樹・鷲尾龍一編著『ヴォイスの対照研究—東アジア諸語からの視点—』くろしお出版
- 和田利政(1969)「る・らる (付 ゆ・らゆ) —受身(古典語)」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社 (初出：『国文学解釈と教材の研究』9巻13号 1964)

#### 調査資料

古事記, 日本書紀(訓注・歌謡), 風土記, 続日本紀(宣命・歌謡), 歌經標式, 仏足石歌, 正倉院仮名文書, 延喜式祝詞, 催馬楽, 琴歌譜, 風俗歌, 東遊歌, 土佐日記, 三代集, 竹

取物語、伊勢物語、大和物語、平中物語、落窪物語、蜻蛉日記、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記

#### 引用テキスト

古事記（本文）：新日本古典文学全集（小学館）、万葉集：佐竹昭広他『補訂版万葉集 本文篇』（塙書房）、宣命：北川和秀編『続日本紀宣命 校本・総索引』（吉川弘文館）、祝詞：沖森卓也編『東京国立博物館蔵本 延喜式祝詞総索引』（汲古書院）、古今集・後撰集・詞花集：新日本古典文学大系（岩波書店）、催馬楽・土佐日記・竹取物語・蜻蛉日記・枕草子：（旧）日本古典文学大系（岩波書店）、宇津保物語：室城秀之『うつほ物語 改訂版』（おうふう）、源氏物語：（旧）日本古典文学全集（小学館）

※本稿は、平成 20 年度科学研究費補助金（課題番号 18520350）の成果を含む。